

略 話にくき あひかたらはん

〔日本書紀神代〕一書曰、○中伊弉諾尊追伊弉冉尊入於黃泉而及之共語。カタル

〔日本書紀十中〕六年二月、對曰、妾高鶴郎姫兄驚住王大姫郎姫、既經多日不得面言、故歎耳。

〔萬葉集三〕天平二年庚午冬十二月、太宰帥大伴卿向京上道之時作歌五首、首略。

〔萬葉集雜歌〕天平二年庚午冬十二月、太宰帥大伴卿向京上道之時作歌五首、首略。

〔新撰字鏡言〕語比云、又支曾モノカタリコト、比加太利モノカタリコト、

〔伊呂波字類抄〕毛語モノカタリコト、

〔倭訓栞前編〕三十三ものがたり、日本紀に談又語話をよめり、文選の序に話をおみ、全浙兵制に

説話を譯せり、

〔日本書紀十九〕十六年二月、祝者迺託神語、報曰、○中天地剖判之代草木言語之時。モノカタリセシ

〔日本書紀十中〕四年○安八月、穴穗天皇○安意將沐浴、幸于山宮。モノカタリセシ眉輪王幼年遊戲樓下、悉聞所

〔日本書紀十七〕七年九月、勾大兄皇子○安親聘春日皇女、於是月夜清談、不覺天曉。モノカタリ○下

〔桃花物語〕見はてぬ夢麗景殿いとときにしもおはせねど、たゞおほかたものはなやかに、けぢかうもてなしたる御かたのやうなれば、心やすき物がたりどころには、殿上人など、かの御かたのほそどのをぞしける。

〔後撰和歌集十三〕雨にもさはらずまできて、そら物がたりなどしけるおとこの、○下

〔枕草子七〕れぐ なぐさむる物
物がたり

〔倭訓栞前編二十四〕はなし。相聚りて物語するをいふ、説文に咄は相謂也と見えたる、無端の義